順天堂史

佐藤進伝 (3)

A Biography of Susum SATO(3)

小川鼎三*

Teizo OGAWA, M.D.

西南戦争に際して

佐藤進の自筆とおもわれる履歴書(明治元年より同40年まで)が残っている。その明治10年のところを見ると、

「明治十年、西南ノ役起ルヤ官軍ノ負傷者頗ル多シ。重傷者ハ悉ク大阪ニ集ムルノ議アリ。遂ニ陸軍臨時病院ヲ設立セラル。此年四月按擢ニ依リ陸軍々医監ニ任シ陸軍本病院出仕ヲ命セラレ直ニ大阪へ出張を命セラル。尋テ大阪病院長ヲ拝命シ数多ノ軍医ヲ指揮監督シテ患者ノ治療ニ軌掌セリ。

同年五月、内閣顧問 木戸孝允氏西京ニ於テ病篤シ。乃チ召サレテ同地ニ赴キ診察ス。続テ行在所ニ於テ拝謁仰付ケラレ木戸氏ノ病状ヲ奏上シ、又大阪臨時病院ニ於ケル傷者ノ状況ヲ奏聞ス。其他独逸留学中普仏戦争ニ於ケル負傷者ノ当時ノ有様等ヲ親シク天聴ニ達ス。畢テ酒肴ヲ賜ハリタリ。

同月、従五位ニ叙セラル。十一年六月鹿児島逆徒征討ノ際ノ職務勲励ノ廉ヲ以テ勲四等ニ叙シ旭日章ヲ賜ヒ年金若干ヲ賜フ。同年十二月陸軍本病院長ヲ命セラル。同十五年十月之レヲ辞ス」とある。

谷紀三郎の編『佐藤男爵』(大正3年)では第12章が西南の役に際しての進の活躍を述べている。大阪に陸軍臨時病院ができたのは明治10年4月1日で、九州の戦地から傷病兵が多数そこへ送られた。軍医総監の松本順、一等軍医正の石黒忠恵は

共に大阪で専らその病院を監督主宰していた。そのとき陸軍卿西郷従道から松本総監を通じて、進の出征を尚中に申し入れた。進は官途につくことを欲していなかったが、国家有事のときであり、その申し入れを快諾したので、直ちに陸軍々医監となり、順天堂の業務を病後の尚中に托して大阪に急遽でかけたのである。

石黒忠恵一等軍医正の編著『大坂陸軍臨時病院報告摘要』が明治11年6月、陸軍文庫として出版されている。その第2章が病院月誌摘要とあって、いろいろのでき事が月に分けて記されている。何日かは不明だが、4月の項に「軍医監佐藤進東京ヨリ来リ、石黒軍医正院長ヲ辞ス。乃チ佐藤軍医監ハ院長ヲ、石黒軍医正ハ更ニ副長ヲ命セラレ、横井(信之)、堀内(利国)兩人副長故ノ如シ、佐藤進最モ外科ニ長シ、声名世ニ藉ク。今回上表自薦シテ此ニ来ル。医官皆其則ル所アルヲ喜フ」とある。この上表自薦は前もって陸軍卿の希望があつてのことと思われる。

また病院月誌摘要の9月の項に「佐藤軍医監胸膜炎ニ罹リ客寓ニ臥ス」とあり、進が激務のため遂に病床についたことが推測される。10月の項の終りに「佐藤軍医監、佐々木(東洋)一等軍医正帰京ヲ命セラレ東帰ス。在院ノ諸員宴ヲ開キ別ヲ送り、石黒軍医正衆ニ代テ別詞ヲ演述ス。石黒一等軍医正副長ヲ免セラレ、更ニ復タ院長ヲ命セラル」とある。西郷隆盛が城山で自刃して西南戦争が終ったのが9月24日だから、進はその終戦のすぐ後に東京に帰ったことになる。

渡辺淳一氏の小説「光と影」は大阪の陸軍臨時病院における進の活躍と寺内大尉(後の首相寺内正毅)との繋りをおもしろく描いている。しかし

* 順天堂大学医学部客員教授(医史学)
Professor of Medical History,
Juntendo University, School of Medicine.
(Aug., 14, 1974 受付)

この病院で石黒忠恵が院長、佐藤進が副院長として書いてあるのは正確でない。また、中野操氏の『日本医事大年表』（昭和47年）の明治10年の項に「佐藤進、大阪陸軍臨時病院ニ於テ住血絲状虫ヲ発見ス、次デベルツマタ東京ニ於テ本虫ヲ発見セリ」とある。ベルツは東京大学に着任して間もなく、パンクロフト系状虫の幼虫ミクロフィラリアをみつけたとされているが、進がその前に大阪でそれをみていたとすれば甚だ興味がふかい。その文献上の証拠を中野操氏に質問したが、記憶しないとのことで残念である。

履歴書によってわかる如く、進は西南戦争の後軍籍にあって、明治11年の末から同15年10カ月まで陸軍本病院長であった。その間は順天堂の業務もやり、外科通論と外科各論の著述をなし、諸地の陸軍病院を視察することも多く、すこぶる繁忙だったとおもう。そして明治15年7月23日に義父尚中が逝去したことにより、いよいよ順天堂の経営に専心する必要から陸軍を辞したとおもわれる。

東京大学の医院長となる

「履歴書」では「明治十七年東京大学医学部講師ヲ囑託セラル。十八年三月大学出仕トナリ（担任）、大学医学部第一医院及第二医院々長ヲ兼ね、陸軍々医本部御用掛ヲ命セラル」とある。いま、『東京大学医学部百年史』（昭和42年）をひもとくと、歴代付属病院長の項に佐藤進は明治18年3月16日から同19年3月19日まで第一、第二医院長を兼務したと載っている。そしてこの百年史の第155ページに「明治11年（1878）11月には医学通学生の臨床教育専用にするため、神田和泉町の大病院址「現、三井厚生病院」に病院を設立し、これを東京大学医学部付属医院と称した。従って本郷の病院は、従来通り東京大学医学部医院とよばれることになった。この名称は極めて煩わしいので（付属の2字の有無のみ）、のちに第一、第二と改められた」とある。

つまり医学部本科生のための第一医院（本郷）と医学部別課生のための第二医院（神田和泉町）

の院長を兼務したというので、その「兼務」が順天堂の院長を本職とする非常勤の意味の兼務だとすると、東京大学としては極めて異例な人事であったとおもう。また同時に明治16年3月から同25年1月まで、外科学教授の宇野朗が第一医院長、第二医院長心得とあるのが注目される。兼務院長の下に院長心得がいたのであろうか。

明治20年前後のこと

私どもが昭和45年につくり、順天堂関係のひとに配ったパンフレット『佐藤進先生略歴』から明治18年から同22年までの分をここに再録する。

「明治18年（1885）（41才）大学出仕勅任官となり、東大第一医院長および第二医院長を兼務、また陸軍軍医本部御用掛となる。この年第二医院にて行った全造鼻術が大いに名声を博した。4月、正五位となり、11月に勲三等に叙され旭日中綬章受章。

1月、順天堂医事研究会発足。

明治19年（1886）（42才）伏見宮大妃殿下の乳癌切開手術を心疾患と老令のため、無麻酔で行う。

3月、東京大学附属医院長を辞す。4月、中央衛生委員となる。9月、順天堂医事研究会々会長となる。副会長佐藤佐。この年外科各論が18巻をもって完結す。

10月、順天堂医院内に講堂が落成、ここで順天堂医事研究会の例会が行われる。

明治20年（1887）（43才）順天堂医事研究会例会にてコカインによる局所麻酔について発表、増訂外科各論の発刊が始まる。

1月、順天堂医事研究会報告を創刊、これが現在の順天堂医学に続く。

佐、ドイツ留学より帰国、副院長として内科を担当す。

明治21年（1888）（44才）6月、前年公布された学位令に則り、医学博士の学位を得る（第7号）。

明治22年（1889）（45才）大隈重信の遭難の治療に当り、脚の切断を行う」

以上の中から、若干の事項について説明を加える。まず明治18年2月5日の東京横浜毎日新聞に

「佐藤進の造鼻術……日本では佐藤尚中の施術が最初」と題して東京府士族某が鼻欠損症に罹り、治を東大医学部第二医院に請うたが、そこで大学講師佐藤進氏が主任でこれに造鼻術を施したとある。そのやり方は少しも書いていないが、造鼻術はインドでは、西洋紀元前1千年のころすでに行われたとして、その歴史を述べている。イタリア法とインド法が区別されて、前者は患者の体の遠隔の皮膚を用い、後者は欠損の近傍の皮膚を用いるとしている。イギリスでカルプ Carpué が1803年以後にたびたびインド法の造鼻手術をやり、ドイツではグレーフェ v. Graefe がそれを研究し実施した。ついでデーヘンバッハ Dieffenbach が大成して、かれは形成外科の父と称せられるにいたった。当時の新聞記事にそういう学術的内容に富むものがあるのに感心した。そして「本邦に於ては往年佐藤尚中氏佐倉に於て、之を施せしを嚆矢とす。尋で明治10年橋本綱常氏長崎に於て施し、外国教師某医学部第一医院に於て施したるもののみ」と述べている。

次に順天堂医事研究会は上記のごとく明治18年1月に発足したが、初めは医局員たちが集まり、彼らの自主的な研究集会であったとおもわれる。最初の会長は阿久津資生であった。その最初の集まりが明治17年7月23日に本郷元町の興安寺（いま本郷二丁目8）において開かれた。明治19年10月1日に順天堂内の講堂が新築落成し、医事研究会はここで開かれ進がその会長となり、ドイツより新帰朝の内科医佐藤佐が副会長となった。佐は前の姓名が井上虎三（寅三とも書いた）で、明治14年末に東大医学部を卒える直前に、佐藤尚中の養子となり、その三女楽（ラク）と結婚したのである。

順天堂医事研究会は『報告』第1集を明治18年1月に発刊した。その第4集（明治18年6月3日刊行）の雑録の中に、当時の某新聞が主催して、「日本の十傑」として各界の第一人者を投票により撰んだところ、医師としては佐藤進が最高点であることを順天堂の職員たちは大いに名誉として、次のごとく書いている。「因ミニ曰フ、我進先生ハ官ニ在テハ正五位勅任ニシテ、東京大学医

学部第一医院及ヒ第二医院長タリ。私ニ在テハ順天堂医院ニ院長トシテ患者日ニ多キヲ加ヘ、本年ノ如キ世間非常ノ不景氣ニモ拘ハラス、目今ハ病客既ニ満院ス。今又輿論ニ於テモ医士ノ泰斗ト指セラル。門下タル我々諸君ハ豈ニ慶賀セサルベケンヤ。又各自勉勵、先生ノ名誉ヲ毀損セサランコトヲ勉メサルヘカラサルナリ」

コカインの局所麻酔がコレル Carl Koller により発見されたのは1884年であるが、日本でのその普及に、佐藤進が甚だつとめたことは明らかである。上記の略歴でも明治20年（1887）に順天堂医事研究会の例会で、コカインの利用を発表しており、明治23年4月の第1回日本医学会でも進は、古加乙涅（コカイン）の局所麻酔について論じている。

前に述べた医師の人気投票とか有名医師の番付発表などは、明治時代しばしば行われたようで、佐藤進はいつも首位あるいはそれに近いところにあり、名医の評判が世上に高かったことがわかる。明治32年には書肆博文館が創業12年を記念して、明治十二傑を政治・法律・軍事・文学・美術・宗教・教育・医術・科学・農業・工業・商業の12部門に分けて、各部門の泰斗を一般投票によりきめたときも、医術では佐藤進が一万三千票で最高位を占めたとある。

濃尾大震災に際して

明治24年10月28日に愛知、岐阜の両県を中心にして大地震がおこり、多数の死傷者と倒潰家屋があり、惨状を極めた。

佐藤進は順天堂医員の山口翁助（尚中の実弟山口晴海の息子）、高比良養次郎の兩人および松山棟庵（福沢諭吉の高弟で、当時松山病院院長）の代理である坂本育次郎を伴ない、11月3日に東京を出発、医療用具と薬剤を入れた大行李二つと食糧としてパンと佃煮を入れた行李一個を携えて遭難者の救護におもむいた。その日記を高比良が詳述したものが進の『餐霞録』（大正3年発行）に載っている。

帝国大学よりはドイツ人教師スクリバ、教授佐

藤三吉が震災地へおもむき、日本赤十字社も治療所を設けた。

11月13日に進は高比良とともに東京に戻り、皇后陛下に震災地の様子、負傷者の救助方法などを言上したところ、みごとな純銀製の湯鐘一個を下賜された。その後に進は岐阜県知事の依頼により11月23日に東京発ふたびでかけた。岐阜の北方に福岡県病院長大森治豊が治療所を開いていた。赤十字社、陸軍々医部もきており、高木兼寛も訪れているので、全国より救護班が濃尾の震災地に送られたとみられる。進は再度の旅を終えて11月27日に帰京した。

その翌25年に岐阜県知事小崎利準、愛知県知事千田貞暁から感謝状が進にあて送られた。

日清戦争にて活躍

進の自筆とおもわれる履歴書で明治27年の項を見ると、「日清ノ役起ルヤ十月下旬広島ニ出張ヲ命セラレ広島予備陸軍病院長拝命、次テ大本営ニ於テ拝謁仰付ケラル。廿八年二月陸軍々医総監トナリ、大本営附ヲ命セラレ、広島陸軍予備病院御用取扱兼務被仰付、同三月皇后陛下予備病院へ行啓、拝謁仰付ラル。職務励精ノ廉ヲ以テ令旨ヲ賜フ。

同三月二十四日、清国ノ媾和使李鴻章狙撃セラレ朝野騒然タリ。勅命ニ依リ馬関ニ差遣サル。翌廿五日同地ニ着、李氏負傷ノ治療ニ従事ス。治術効ヲ奏シ創傷日ヲ逐フテ快方ニ赴ク。四月中旬ニ至リ痊愈、両陛下宸襟ヲ安セラレ臣民始テ愁眉ヲ開クヲ得タリ。……李鴻章治療記事ト題スル日記一冊ハ土方宮内大臣ヨリ陛下ニ奉呈ス。又李鴻章ヨリ贈ラレタル七律ハ徳大寺侍従長ヨリ天覧ニ供シ奉レリ。同月（四月か）清国皇帝ヨリ雙竜宝星勲章二等ヲ賜ハリ、李鴻章ヨリハ玉爐一座、脂玉双鱼洗一對、秋羅両足及紡綢二足ヲ贈ラル。

同八月十二日、帰京。翌日拝謁仰付ケラレ、広島陸軍予備病院ニ於ケル傷病者ノ状況ヲ親シク奏上ス。同月廿三日勲二等ニ叙セラレ。金幣若干ヲ賜フ。同時ニ大本営附ヲ免セラル」

この履歴書で日清戦争に際しての進の活躍がよ

く知られるが、とくに下関での講和談判における清国の全権大使李鴻章が日本人暴漢に狙撃され顔面に負傷したとき、広島にあった佐藤、石黒の両軍医総監がさっそく船で下関にいたり、主として佐藤進が治療にあたり、銃丸はとり出さず、幸いに治癒できたことは大きい功績であった。

履歴書の中にある「李鴻章治療記事ト題スル日記」は、いま『餐霞録』に載っている「李中堂治創記」がそれであろうとおもう。このとき進が李鴻章の深い信任を得たことは明らかで、鴻章の息子李経方とも親しく交わった。東京大学の外科教授スクリバも見舞に下関に来たが、彼が腕をふるう必要が全くなかったのである。

李鴻章はそのとき73才で、軀幹偉大で、身長は6尺をこえ、毛髪は頭頂部で禿げた所があり、その他は一様に薄かった。眼は大きくはないが、その光爛として人を射るものがあつた。鬚は多くないが、鼻下とあごに毛を蓄え、あごひげは長さ3,4寸であつたという。その治癒直後の李鴻章の写真が今も私どもの手もとに残っている。

李鴻章が進に贈った七律は次のものである。

贈日本総医監佐藤

耄年秉節赴東瀛 願化干戈見太平

盟約重申同富弼 伏戎一擊鄙荆卿

奇才医国君無敵 妙手回春我更生

待乞宝星邀上賞 綠草歸去達通明

合肥 李 鴻 章 ㊦㊦

この詩の中の「妙手回春」の4字を横書きにし、そのあとに「佐藤医国手 李鴻章」と自署した額がいま順天堂大学理事長室に掲げられている。また清国皇帝および李鴻章からの贈り物も大切に保存されている。

活人劔の碑建つ

活人劔とは佐藤進が下関の引接寺にて李鴻章の傷を治療しているとき、鴻章が進に医者で劔を帯ぶるのは何故かと尋ねたとき、進はこの劔は人を活かすためのものと答えたとの逸話にもとづく。そして進は活人刀と題する七律を作って李鴻章に示したことが「李中堂治創記」の中にある。

その活人劔の問答を天下の美談として、遠州秋葉山可睡斎いま静岡県袋井市、東海道線袋井駅の北方にある（名刹）の境内に、当時この寺の住職であった日置黙仙師の発意によりりっぱな活人劔の記念碑が建てられた。その建立式が明治33年9月28日に行われて佐藤進は陸軍正装で出席した。可睡斎の住職日置黙仙師は僧侶70余名を随えて大祈禱を修行した。ついで銘文朗読、香語、読経、普回向などの盛大な儀式が行われた。

長大な銅製の劔が天を指して立ち、劔の柄には活人劔の3字が篆文で刻まれていた。その台座がはなはだ凝っていて見事なものであった。高さは地面から劔の先までが20尺という。銅鑄の部分の木型は帝室技芸員高村光雲の作で、台座まで入れた全体の設計者は前田香雪であった。

順天堂医事研究会雑誌の第329号、第313号（明治33年9月、10月発行）にその建立式の盛況が載っている。この碑は日清戦役における両軍戦死者の霊を慰めるためのものであり、台石の下に大乘妙典の文句を一字一石に書写したものが埋蔵されたのである。もともと佐藤進は可睡斎の先住である西有穆山禪師から禪を学び、碧巖録の中に活人劔という語があるのを覚えていて、李鴻章の突然の質問にそれを答えたというので、この寺の境内に記念碑の建つ理由があったといえる。

台石に次の文が刻まれているとおもう。

「旌徳活人劔碑

従四位勲二等陸軍軍医総監医学博士 佐藤進君 清国講和全権大使李鴻章伯の傷痍を施治回復せしめられし名誉と伯の質問に明答を与えられし功績とは禪機の妙用神力の感応として長く後世に伝ふべき事なりとて、有志者相謀りて記念活人劔は建設せられたり。茲に博士の夫人静子君令息昇君等妙典八巻を一字一石に書写し其下に埋蔵せしめられる。実に明治二十七、八年の役に戦死病歿したる者の冤親平等供養の爲めには無上の大功徳なるべし。喜悦の余聊其顛末を記す。

明治三十二年二月 現 董四十八世 黙仙誌

活人劔建設幹旋 従五位勲五等 河瀬秀治

同 図案及製造監督 前田香雪

同 原型雕刻 帝室技芸員従六位 高村光雲
同 鑄工 藤井利延
同 石工 宮 亀年

この記念碑は可睡斎の名物として、その偉観は多くの人に感銘を与えていたが、第2次大戦の間にその銅製の部分が供出されて、今は台石のみが淋しく残っている。

だいたい建設当時の記録をみると、それをつくる議は明治29年に始まったようで、明治31年の末にはすでにでき上がった現物が東京から可睡斎に送られており、その後1年半あまりして建立がおわり、立劔式が行われたのであった。

日露戦争に際して

自筆(?)の履歴書をみると、「明治三十七年日露戦役起ル。五月廿三日陸軍々医総監ノ現役勤務ニ復シ大本営附ヲ仰付ラル。両陛下ニ拝謁ス。同時ニ広島予備病院御用掛兼勤ノ命アリ、直ニ之ニ赴ク。同十月十日大阪、姫路、小倉ノ各病院視察ヲ命セラル。蓋シ広島ハ戦地ヨリ送還傷病者ヲ受クルノ要枢ニシテ復之ヲ各地予備病院ヘ配送スルノ地点タレハナリ。欧米各国ノ軍医等亦来リ觀ル者甚タ多ク、宮廷ヨリハ屢々侍従武官ヲ派シテ患者ヲ慰問セラル……」

「同卅八年二月五日、第十一師団所屬普通寺予備病院及松山俘虜收容所病室 御用掛兼 務 仰付ラル。彼等幸ニ亦深ク我医術ニ信賴シ治療ノ經過頗ル良佳。五月卅一日、日本海敗残ノ露国海軍々人二百三十余名石州浜田ニ漂着ス。創傷者多数ナルヲ以テ星夜赴キ診ス。

同六月五日、陸軍々医総監ニ任セラレ、同廿三日小倉及熊本予備病院出張巡視ヲ命セラル。十月、清国へ出張ヲ命セラレ、大連、柳樹屯、遼陽、奉天、鉄嶺、開原、旅順等各地ノ兵站病院及倉舎病院ヲ巡視シ、十一月十二日広島ニ帰着ス。会々露国ニ於テ病院船ヲ以テ俘虜患者ヲ迎フルノ報ニ接シ松山ニ赴キ告別式ヲ執行ス。将校下士卒ニ至ルマテ深ク帝国ノ慈仁ニ感シ泣テ謝意ヲ表スルモノアルヲ見ル。同地收容所病室設立以来此ニ至テ大凡ソ十九月患者総數四千二百七十余名」とある。

最後の数字はロシア人の傷病者の数であろう。

同年の12月17日に進は帰京し、12月26日に大本営附及び広島予備病院並びに 普通寺予備病院御用掛を免ぜられた。

翌39年4月1日に戦役の功により 旭日重光章及び金四千元を賜わり、さらに40年9月21日、勲功により男爵を授けられて金壹万円を賜ったのである。

『日露戦役医談』という一書が明治39年3月の序文をもって毎日新聞社から出された(本学の山崎文庫 No. 5802)。佐藤進の口述を毎日新聞社編輯局の白井俊一が筆記したものである。そのあとに復命書と題した明治37年11月付の「陸軍軍医監佐藤進」より 陸軍大臣寺内正毅にあてた文章がある。これで見ると、前記の履歴書の五月廿三日陸軍々医総監は陸軍々医監(少将相当官)の誤りかと考えられる。また本書の終りに「回想録」と題した進の文章は、自分が経験した戊辰の戦、普仏戦争、西南の役、日清戦争、日露戦争を比較して述べたもので、はなはだ興味ぶかい。また重要な内容である。これらは大正3年出版の『餐霞録』にも収録された。なお『餐霞録』には進が明治37年6月7日から翌38年10月16日まで克明に書いた日記が「滞広日記」と題して載っている。

その中で進が広島に在って、順天堂の改築計画をすすめていたことが次の文でわかる。「三月十七日、晚餐後田中(二等軍医正)前田(一等軍医)兩人を招き、順天堂改築工事、殊に手術場の設計図に就て評議の末、年少変更する所ありたり」

「八月五日 大野より 順天堂手術場の 絵図面来る。相互の希望殆ど一致す。是にて確定の見込みあり。

八月六日、順天堂手術場図面に付大野へ返書を送る。

十月五日、日置黙仙氏より来状、……大野伝兵衛より順天堂本館図面に手紙来る」

これは明治39年11月に落成、お茶の水にその偉容を誇って、大正12年の大震災で焼けた順天堂医院の建設の話にちがいない。

大韓医院の設立

自筆(?)の履歴書をみると。

「明治三十九年六月六日、宮内省御用掛(勅任待遇)仰付ラレ、命ヲ以テ韓国ニ渡航ス。同国議政府ヨリ大韓病院創立委員並ニ顧問ヲ囑託セラレ。

明治四十年十月、皇太子殿下韓国御渡航ノ盛儀アリ、供奉仰付ラレ、伊藤統監ト共ニ先発シ、之レカ準備ニ執掌ス。時恰モ虎列拉病流行ノ時ニ際シ防疫顧問ヲ命セラレ、日夜努力其結果速ニ撲滅スル事ヲ得タリ。事畢リテ仁川ヲ解纜シ鎮海湾ヲ経、長崎ニ奉送シ、辞シテ再ヒ京城ニ至ル。供奉滞韓中韓国皇帝陛下ヨリ 勲一等大極章ヲ賜フ。

同 十二月 帰朝后、東宮御所ニ於テ御膳食仰付ラレ、慰勞トシテ物品並ニ金幣ヲ賜ハリタリ」とある。

この大韓医院の建設および日本の皇太子殿下渡韓の件は谷紀三郎の『佐藤男爵』(大正3年)に詳しく載っている(第17章、男爵と韓国、272~294ページ)。伊藤博文の要請により進は韓国の医事衛生のために大いに尽力したのである。明治39年6月に進は初めて韓国の土をふみ、京城に大きい病院をつくるため、適当な場所をやっと馬頭山にみつけた。伊藤との最初の約束は進が1年に2度渡韓し、一度の滞在日数は2カ月または3カ月というのであった。

この大韓医院は初め木造の計画であったが、レンガ造りに改められた。明治39年9月に起工して明治41年9月に内外の工事が全く終り、10月24日に盛大な開院式をあげられた。

明治40年の9月に皇太子殿下(後の大正天皇)が渡韓されることにきまり、進は先発して韓国の衛生状態をしらべたが、京城でコレラが発生しており、進は伊藤博文と相談して厳重な防疫法をおこなった。かくして皇太子は無事に韓国訪問の旅を終えることができた。このとき皇太子に供奉したのは有栖川宮威仁親王、元帥東郷平八郎、陸軍大將桂太郎らであった。

皇太子が帰国されるときに進は軍艦出雲に乗っ

て仁川から鎮海湾をへて佐世保まで扈從した。それから進は京城へ引き返して、韓国の衛生状態の改善に更につとめた。韓国宮廷の人びとに種痘を施すことをはじめた。そして韓国皇帝の信任を得て、いろいろと西洋の学問、ことに医学について

進が直接にお話をしたようである。

進がそのとき渡韓したのは、前後7、8回に及び足かけ3年であった。明治41年10月に新築完成の大韓医院の初代院長となったが、同年12月には辞任して東京に帰った。

てがみ

未 熟 児 網 膜 症 の 裁 判

某地方裁判所において次のような判決が行なわれたと言います。

すなわち、某赤十字病院に生下時体重 1120 g の未熟児が全身チアノーゼおよび呼吸が不整で哺育器に収容され、38日間の酸素投与を受け53日間の経鼻栄養がなされた。その後眼科医により未熟児網膜症と診断され治療を受けたが結果的には失明した。

患者の両親は日赤を相手として訴訟し、その結果当病院は未熟児センターを有するものであるからより高度な医療知識および医療技術と、これに伴うより高度の注意義務が要求される。それにも拘わらず未熟児担当小児科医が眼科受診を早期に行なうべきであったとして、患者側の勝訴と判定した。

これに対してどのように考えられるかご意見を聞きたい。

(OF生)

《回 答》

まず結論を先に言えば、この判決は現在の我国の未熟児に関する医療知識および技術から判断して担当小児科医に対し酷であると思う。

というのは、この未熟児は生下時体重が、1 K 120 g であり、全身のチアノーゼと不規則な呼吸

があったのであるから、担当小児科医は当然まず生命を救うために十分な酸素を吸入させようと試みたにちがいない。一応生命をとり止めた後は酸素欠乏による脳性小児麻痺の発生を極力予防しようと努めたことであろう。

現在の小児科学のレベルから考えて、未熟児の血中酸素量を絶えずチェックするということは至難なことである。哺育器の中の酸素濃度を経時的にチェックすることすらも困難なことが多い。担当小児科医は感染を予防し、経鼻栄養を行ない生命を救い、とにかく脳性麻痺の発生を予防し得ただけでも、私はその労を多としなければならないと思う。

たしかに担当小児科医が、もう少し早く眼科を受診させていたならば理想的であると言えよう。しかし衆知のように未熟児網膜症は、単に哺育器内の酸素濃度が40%以上の過剰な時にのみ起るものではなくて、未熟時の網膜自体の未熟性に基づくものであることが明らかになっている。しかも哺育器内の酸素濃度が、たとえ40%以上であっても未熟児の呼吸能力の差異によって酸素の血中濃度は著しい個人差を示すものである。

尚、現在の未熟児網膜症の治療は光凝固法によって行なわれているが、その確実な治療効果は現在なお疑問としなければならない。